Construction of the Geo-story Incorporating Sake Brewing Industries in the Geopark: A Case Study of Itoigawa Geopark, Central Japan

坂口 豪 SAKAGUCHI Suguru

IGU Regional Conference 2015 Moscow

(1) 研究発表の概要

学術的に重要な地域の地形や地質を「大地の遺産」として扱うジオパークの取り組みは、遺産の保全や保護を主要な目的とする世界遺産に対して、保全・保護のみならず遺産の活用を通じた地域振興をも包括する。ジオパークは、従来、一般にはなじみの薄い地形や地質といった地域資源に対する新しい管理や活用の在り方として注目されている。ジオパークを観光資源として利活用する場合、自然現象に由来する自然資源と人文現象に由来する人文資源を兼ね備えた地域資源がジオストーリーにとって非常に重要となってくる。そこで、本研究発表では人文資源と自然資源を兼ね備えた地場産業である酒造業とそこで醸造される日本酒に焦点をあて、それらのジオストーリーへの有効活用への可能性について議論していくことを目的とした。

酒造業の視点を取り込んだジオストーリーを構築するにあたっては地層や岩盤に由来する水質や原料米の詳細、ジオパークにおける酒蔵の役割などを検討する必要がある。各地のジオパークでは大地の恵みとしての「水」や「米」を日本酒という媒体を通じてブランド化や商品化しているが、酒造業を体系立てられたジオストーリーとして扱っている事例はほとんどみられない。そこで5つの酒造業者が立地する糸魚川ジオパークを事例に、「水」と地質の関係性を調査することから酒造業を取り込んだジオストーリーの構築可能性を論じた。

酒造業は「水」を通して地質と深い関係にあり、酒造業者は地質に特徴づけられた「水」を活かした酒造りを行っている。酒造業を取り込んだジオストーリーは、酒造用水の性質と、その要因となる地質を結びつけることで構築することができた。発表では糸魚川の5つの酒造業者の「水」とジオストーリーを表に

まとめたものを提示した。

ジオツーリズムとして酒造業を取り込んだジオストーリーを活かす方策を検討するため既存のジオサイトにジオポイントとして酒造業者を付加した図を作成した。ジオポイントとして酒造業や日本酒に関連した地域資源を取り込むことは、住民にとってジオサイトをより身近な対象とすることができる。他方、観光客の視点としても、ジオツーリズムのなかで実際に酒造りに関連する資源を見学し、試飲を通して日本酒を体感することで、大地の恵みを視覚以外の多くの感覚からも感じるができる。

結論として、現状のジオサイトに酒造業を取り込むことによって、さまざまなジオストーリーが結びつけられ、ジオストーリーのスケールもジオサイト内や外に、さらにジオパーク全体のジオストーリーへと広がっていくことをモデル図で示した。

(2) 研究発表の成果

本研究発表は、IGCの「ジオパーク」のセッションにおいて実施されたものである。会場には世界各地から10名を超えるジオパーク関連の研究者およびジオパークに関心のある大学院生が集まっていた。発表後、3名から質問およびコメントをいただき議論を深めることができた。以下にその一部を記載する。

ジオパークの研究に地場産業の視点を持ち込んだことは新しい取り組みとして肯定的に捉えるコメントを複数いただけた。とくに日本酒はローカルな題材ながらもワインツーリズムの視点と類似するという指摘も受けた。ワインツーリズムでは原料となるブドウやワインを生産する土地の気候や土壌などの風土も重要なアトラクションとなる。今後の課題として多くの研究蓄積のあるワインツーリズムの視点を参照して日本酒

のストーリー構築の方法論を再度検討していきたい。

(3) その他

ジオパークの取り組みは2004年から始まり、その活動も10年を越え、研究蓄積も進みつつある。しかし各国でジオパークの推進状況や研究の視点も異なっている。日本においてはジオストーリーを構築するこ

とがジオパーク認定のための重要な視点となっている。他方、海外においてはジオストーリーに関する議論はほとんどない。本発表では日本がジオパークにおいてストーリーを重要視していることも伝えたかったが、そのことを理解していただけたようには感じられなかった。この点については今後の課題としたい。

(首都大学東京大学院都市環境科学研究科)